植草学園大学研究紀要　第２巻　69～76 頁（2010）

B.Edu.Health Sci.UG Univ. vol.2,69-76,2010

調査報告

異年齢保育に携わる保育者の意識に関する調査研究
－千葉市の保育者を対象にした質問紙調査に基づいて－

広瀬由紀[1]　植草学園大学発達教育学部

太田俊己[2]　植草学園大学発達教育学部

A Study Conducted on Child-Care Workers who Involved in Multiage Classroom
－Based on Questionnaire Survey of Child-Workers in Chiba City－

Yuki HIROSE　Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University
Toshiki OHTA　Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

本稿では，異年齢保育の教育的意義を探るため，30 年以上異年齢保育の形態を続けている，千葉市の公立保育所に勤務する保育者を対象に質問紙調査を行った結果について報告する。結果では，先行文献で示唆されている異年齢保育を受けている子どもの教育的意義について，保育者自身も経験的に同様の意義を感じていることが明らかとなった。また，異年齢保育を展開する上では，難しさを感じる保育者が多いが，その内容については，保育所保育指針が示す保育の質の向上に関する内容と多くが合致した。
キーワード：異年齢保育，縦割り保育，保育者の意識，教育的意義，質問紙調査

This study reports the results of a questionnaire directed at the child-care workers in Chiba City, to find the educational benefits of multiage classroom.　Chiba City has been offering multiage classrooms for the past thirty years.　As a result, the child-care workers found the educational significance pointed out in the earlier literature. At the same time, many workers experienced difficulties in these classrooms, which agree with the matter of guideline for child-care to improve its quality.
Keywords：multiage classroom　vertical classroom　consciousness of child-worker　educationally significance　questionnaire survey

１．はじめに

1997 年に厚生省（当時）の補助事業として日本保育協会が実施した「保育所の保育内容の実態に関する調査」[1] によれば，日常的に実施している保育形態について，「基本的に同年齢だが，異年齢で保育するときもある」が 72.1%，「基本的に異年齢混合だが，同年齢で保育するときもある」が 10.1%，「異年齢混合」が 5.4%となっており，9 割近い保育所が異年齢混合の保育を取り入れていた。

荒井は，兄弟姉妹がいない子どもに対して，年齢の近い血縁関係のなかで培われるような役割習得の

[1]　著者連絡先：広瀬由紀
[2]　　太田俊己

機会を保育の場で補償することは，現在の保育現場に求められている重要な機能の一つであるとしている[2)]。また，坪井らは，異年齢保育について，少子化の問題とは関係なく，多様な仲間関係の形成や自我の発達にプラスの影響を期待するものであるとしている[3)]。

一方で，横松らは，近年の異年齢保育への関心の高まりにもかかわらず，異年齢保育に関する先行研究や実践の整理を行っているものはほとんどなく，行われている整理も不十分であることを指摘している[4)]。「異年齢保育」と類似した用語としては，「異年齢児保育」，「縦割り保育」，「混合保育」がある[5)]が，夏堀は，異年齢保育[(注1)]の厳密な定義は，保育研究のなかで受容されていないこと，また，異年齢保育[(注1)]の「教育的意義」の議論および実証の不足を指摘している[6)]。

本研究では，夏堀が指摘する異年齢保育[(注1)]の「教育的意義」を探るため，1978 年から，異年齢のクラス編成を導入し，30 年以上の実践を重ねている千葉市[7)]の公立保育所に勤務する保育者へ行った異年齢保育に関する質問紙調査の結果を報告する。

2．方法

2.1　調査時期

平成 21 年 8 月

2.2　調査対象

千葉市内の全保育所保育士を対象とした障害児保育研修の参加者のうち，千葉市の公立保育所に勤務している保育士 60 名

なお，本調査は，今後予定している異年齢保育担当者への質問紙調査の予備調査を兼ねて実施した。

2.3　調査方法

千葉市保育課へ調査への承諾を得た後，障害児保育研修の際，資料と一緒に調査用紙を参加者に配布した。研修終了後に任意で記入してもらった後，当日のうちに回収を行った。

2.4　回答数

57 名（回答率 95%）

3．結果

3.1　回答者属性

保育経験については，5 年以上 10 年未満の保育士が 21 名（36%），20 年以上 11 名（19%），10 年以上 20 年未満 10 名（18%）で上位を占め，経験豊かな保育士からの回答が多かった（図１）。

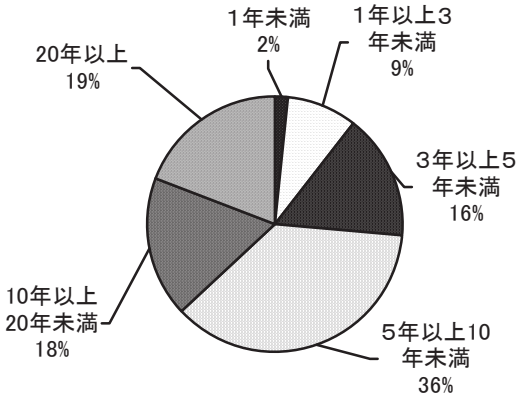

図１　回答者の保育経験年数

担当クラスについては，図２で示すとおり，以上児クラスが 40 名（78%）で，現在，実際に異年齢での保育に携わっている保育士からの回答が多く，その受け持ち方については，複数担任の一人として携わっている保育士が 44 名（81%）となっていた（図３）。

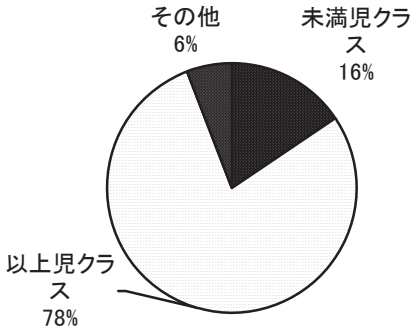

図２　回答者の担当クラス

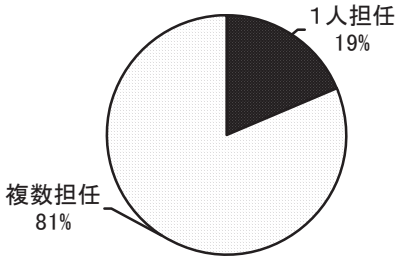

図３　クラスの受け持ち方

また，同じクラスをどのくらい継続して受け持っているかという質問に対しては，１年目という回答が 28 名（53%），以下，２年目が 15 名（28%），３年目が 8 名（15%），４年目が 2 名（4%）となっており，今回の回答者においては，１年目が過半数を，２年目までを加えると 80%であったが，経験年数が 1 年増すごとに，その人数は半数程度に減じる傾向を示した（図４）。

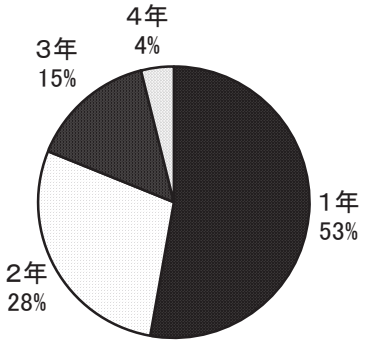

図４　同じクラスの継続受け持ち年数

3.2　異年齢保育に対する保育者の所感

今回は，異年齢保育について，インクルージョンの観点に基づき，「保育士にとって」「特別な配慮を要する子どもにとって」「その他の子どもにとって」の３つの視点から，次に示す４段階の評定をお願いした。

４段階の評定を数値化し，「とてもよい（4 点）」「よい（3 点）」「あまりよくない（2 点）」「よくない（1 点）」として，視点ごとに平均値を算出したところ，「保育者にとって」では，2.87 点，「特別な配慮を要する子にとって」では，3.03 点，「その他の子どもにとって」では，2.95 点となった。すなわち，いずれの視点についても，中央値 2.5 点を上回っており，保育士は，異年齢保育に対して，積極的な評価をしていることがうかがえる。なお，保育士の経験年数や受け持ちの形態，担当のクラスによる有意差は見られなかった。

また，異年齢保育形態であることに関して，「子どもにとって」「保育者にとって」の２つの視点から，自由記述を求めたところ，それぞれ 42 件，37 件の意見が寄せられた。

「子どもにとって」で得られた自由記述については，高田 [8] が「異年齢保育の意義」として挙げている内容を参考に，下記に示す分類項目を作成し，分類を試みた。（）内の数字が分類した記述数である。

（１）　子ども同士のタテ・ヨコの豊かな関わり
　①　大きい子どもから小さい子どもへの関わり (18 件)
　②　小さい子どもから大きい子どもへの関わり (18 件)
　③　様々な年齢発達の子どもがいることでの育ち合いや関わり（21 件）
　④　一人っ子（核家族）が多い中での経験（8 件）
（２）　自分を拠点とする場所・居場所のひろがり（1 件）
（３）　その他（5 件）＊

＊2 件で，異年齢保育に対し，マイナス面が感じられる記述があった（表１　④および⑤）。

今回の自由記述内容を，回答者属性と関係させてみると，（１）－④「一人っ子（核家族）が多い中での経験」に関する記述はすべて，保育経験が 5 年以上の保育者であった。

また，分類項目とは別の視点で「障害のある子」や「気になる子」に関する自由記述についてみると，表１で示した 3 件（①・②・⑤）の他に「年齢発達に遅れがみられる子でも，異年齢で遊ぶことができるため，障害のある・ないに関わらず楽しく遊んでいる」という 1 件の記述がみられ

た。

表１　（３）その他に分類した自由記述（注2）

① 健常の子にも苦手なことがある。その児だけが目立たない。低い年齢の子もいるので，目立たない。→当たり前にその子がいるように子どもたちは捉えている。
② 障害児も最初は，年上児が受け入れてくれて，それを見て，他年齢も受け入れる姿が多くなってきたと思う。
③ 部屋の環境設定の仕方（どの年齢にも満足できる環境づくり），HR 等での絵本，紙芝居の選び方
④ 年齢差や力の差，心・体の面の発達の差など，色々な面からみて，クラス全体が落ち着かず，見とれないという様子，姿が見られるので難しいと思った。
⑤ とても障害が重く集団生活が難しいケースの子どもにとって，どうなのか疑問に感じる時があります。

一方で，「保育者にとって」で得られた自由記述については，以下の分類項目を独自に作成し，分類を試みた。（）内の数字が分類に当てはまる件数である。

（１）　実践上感じている楽しさや喜び等（12 件）

（２）　異年齢保育の展開にあたっての思い

　①　配慮・工夫点(4 件)

　②　難しいと感じる点（21 件）

（３）　年齢別保育とのバランス

　①　配慮・工夫点（5 件）

　②　難しいと感じる点(7 件)

さらに，（２）－②での「難しさ」の具体的な内容の内訳をみると，a）子ども一人ひとりへの見取り（6 件），b）保育展開における個に応じた関わり（7 件），c）ホームルームなどクラスでの活動における活動設定（4 件），d）クラス活動など全体で行うものの進め方（3 件），に大別することができた。

（３）－①に関する内訳では，職員の共通理解の必要性・重要性に関する内容（3 件），（３）－②では，他クラスにいる担当年齢の子どもの把握（注3）に関する内容（3 件），異年齢保育とのバランスの持ち方に関する内容（2 件）が見られた。

４．考察

従来，異年齢保育の研究では，その意義等の検討に際し，事例検討や心理学的なアプローチが行われてきている（子安ら[9]，脇ら[10]，松永ら[11]，夏堀[6,12]，今井ら[13]など）。しかし，本研究では，千葉市が自治体として，30 年以上にわたり異年齢保育を継続して実施していることを受け，60 名の保育者を対象とした質問紙調査で，異年齢保育の教育的意義に関する検討を行うことができた。

ここでは，結果に基づき，「保育者が感じる異年齢保育の教育的意義」および「異年齢保育を展開する立場としての思い」の 2 点から考察を加える。また，別な視点から，異年齢保育であることが障害のある子や気になる子の保育に及ぼす影響についても考察を行う。

4.1　保育者が感じる異年齢保育の教育的意義

回答についての評定処理結果からは，異年齢保育であることに対して，保育者は，総じて高い評価をしていることが示された。これは，「子どもにとって」の異年齢保育に対する自由記述において，集まった 42 件中，マイナスと思われる内容が 2 件のみだったことからもうかがえる。

自由記述においては，先行文献で示されているような子どもにとっての教育的意義[5,8]を，保育者自身が体験として感じていることが明らかとなった。また，異年齢保育では，保育者が，年上・年下の子どもに固定的な役割を当てはめすぎることが課題となっている[5]が，今回の調査においては，「年上児」「年下児」という固定的な役割に対する意見と同数以上に，「異年齢として互いに育ち合うこと」そのものに関する記述が見られた。この背景を考える際，夏堀が，異年齢保育を実施している保育園の保育記録の分析から，「お世話」の関係性へ向けられていた保育者の注目が，その後，子ども一人ひと

りへと推移したことの報告[12]は示唆に富んでいると思われる。

4.2　異年齢保育を展開する立場としての思い

異年齢保育に対して，高い評価をし，教育的意義を感じている一方で，その保育を実際に展開する立場としては，多くの工夫や配慮を行い，また難しさを感じながら過ごしていることが示唆された。

保育展開上の工夫や配慮している点および難しさについては，「保育所保育指針解説書」[14]（第 4 章（２）指導計画）で書かれている内容と共通する部分がみられた。

例えば，「子ども一人ひとりの見取り」ということに関しては，「ア　指導計画の作成」の解説の中で「指導計画の作成の基本」として挙げられている【子ども一人一人の育ちの理解】へ通ずる部分が大きいと考えられる。同様に，「保育展開における個に応じた関わり」や「職員の共通理解の必要性・重要性」ということについては，「イ　指導計画の展開」の解説として示されている【職員の協力体制による保育の展開】および【子どもの変化に応じた柔軟な展開と多様な援助】と共通する内容であると考えられる。

すなわち，異年齢保育を展開する立場として感じている難しさや実際に配慮・工夫している点は，異年齢ならではというものではなく，保育の質そのものを向上させることに通じる内容であると考えることができる。

4.3　異年齢保育であることが特別な配慮を要する子の保育に及ぼす影響

今回の調査では，「異年齢保育」について保育者自身がどのように捉え，感じているかということに焦点を当てて調査を行った。そのため，特に調査側から障害のある子や気になる子と関連させた記述を求めることはなかったが，自由記述では，保育者側からそれに関する 5 件の意見が寄せられた。また，異年齢保育であることについて，3 つの視点から 4 段階評価を求めた中では，「障害のある子にとって」の項目で，結果として最も平均値が高い数値を示した。このことから，異年齢保育であることが，障害のある子や気になる子を含めた保育を展開するという視点から見ても，保育者は積極的な意義を認めており，高い意義を持つと考えられる。

渡邉は，異年齢保育の回顧と展望について記述する中で，同年齢保育の見直しを推進した要因の一つとして，1970 年代に広がりつつあった障害児保育を挙げている[15]。この点からも，異年齢保育の導入・展開と障害児保育の進展との間に何らかの関係や共通性があることがうかがわれる。

今後は，障害のある子や気になる子を含めた保育を進めるにあたって，異年齢保育という形態であることが，どのような形で影響しているのかという点について，担当者への聞き取り調査やフィールドワーク等で検討を行うことが必要であると考えられる。

5. 倫理的配慮

質問紙調査への回答は，任意であることを調査用紙に明記したうえで実施した。なお，本研究は，植草学園大学倫理審査委員会の承認を得て実施したものである。

６．謝辞

本研究にあたり，質問紙調査の実施に際し，多くのご協力をいただきました千葉市保育課の皆様，研修後のお疲れの中，質問紙へ丁寧にご回答いただきました保育者の皆様一人ひとりに感謝いたします。

なお，本研究は，平成 21 年度科学研究費補助金（若手研究Ｂ　課題番号 21730642）の助成を得て実施したものである。

（注 1）原文では，『縦割り保育』と記されているが，用語を統一させるため，本稿では『異年齢保育』と表記した。

（注２）原文のままで表記している。

（注３）千葉市の場合，３歳以上児について，生活の基盤となるクラス構成を異年齢で行っていると同時に，保育の中で必要に応じて，年齢別の活動も取り入れている。すなわち，各クラスの担任は，併行して，３歳から５歳のいずれかの担当者という立場も担っているということになる。

７．文献

1) 日本保育協会．保育所の保育内容の実態に関する調査研究報告書．1997（オンライン）<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai06/kekka2.html#2>（参照 2009.11.20）
2) 荒井洌．異年齢児の保育カリキュラム―たてわり保育の指導計画と実践例．ひかりのくに．2003
3) 坪井敏純・山口郁．異年齢保育の中の子どもたち．南九州地域科学研究所所報．2005；21：1-10
4) 横松友義・安達保雄・伊勢慎・永原慎太郎・稲益かおり．異年齢保育に関する体系的研究の重要性．岡山大学教育学部研究集録．2006；132：69-76
5) 管田貴子．異年齢保育の教育的意義と保育者の援助に関する研究．弘前大学教育学部紀要．2008；100：69-73
6) 夏堀睦．縦割り保育活動に期待される学習効果．富士常葉大学研究紀要．2008；8：79-89
7) 広瀬由紀．千葉市における統合保育の変遷．植草学園大学研究紀要．2009；1：115-121
8) 高田清．異年齢保育という方法技術と仲間づくり．季刊保育問題研究．2006；219：81-89
9) 子安増生・郷式徹・服部敬子．縦割り保育の幼稚園における「心の理論」および関連する能力の縦断的研究．京都大学大学院教育学研究科紀要．2003；49：1-21
10) 脇信明・麻生啓一・伊藤由美子・原田美穂・無着下螢子・堀尾知弘・甲斐由佳里・沖本薫・原美里・小林いつか．異年齢保育における子どもの発達に関する考察―ひめやま幼稚園における実践をもとに―．別府溝部学園短期大学紀要．2005；25：17-24
11) 松永恵美・郷式徹．幼児の「心の理論」の発達に対するきょうだいおよび異年齢保育の影響．発達心理学研究．2008；19(3)：316-327
12) 夏堀睦．正統的周辺参加論の視点による異年齢保育の効用．富士常葉大学研究紀要．2007；7：171-184
13) 今井裕子・生田貞子．縦割り保育に関する事例研究．富山大学教育実践総合センター紀要．2002；3：25-32
14) 厚生労働省．保育所保育指針解説書．フレーベル館．2008：130-136
15) 渡邉保博．異年齢保育の回顧と展望．季刊保育問題研究．2006；219：6-15

（調査用紙）

＜異年齢保育に関する保育者の意識調査＞

本調査は、①異年齢保育形態（いわゆる縦割り保育）と障害児保育との関連性について、ならびに②異年齢保育をすすめるにあたっての実際の配慮事項、に関する資料を得ることを目的としています。

ご記入に際しましては、先生方の可能な範囲でお答えいただければ幸いです（任意）。

なお、今回得られた情報につきましては、研究目的でのみ使用いたします。

植草学園大学　　広瀬　由紀

＜回答者に関する情報＞

（質問１：保育経験）

◆保育者として、今まで勤務された経験年数に該当するところにチェックしてください。

□　１年未満　　□　１年以上３年未満　　□　３年以上５年未満

□　５年以上１０年未満　　□　１０年以上２０年未満　　□　２０年以上

（質問２：現在の受け持ち）

◆現在ご担当されているクラス等について、該当するところにチェックしてください。

□　クラス担任（一人担任）　　□　クラス担任（複数担任）　　□　フリー　　□　その他（　　）

□　未満児クラス担当　　□　以上児クラス担当　　□　その他（　　）

◆今年度担当のクラス・子どもたちの継続受け持ち年数　：　（　　）年目

＜「異年齢保育形態」に対する所感＞

（質問３：「異年齢保育形態」に関する印象）

◆以下の質問に対して、該当すると感じられる場所に○印を付けてください。

・「異年齢保育形態である」ことは、保育者にとって…

とてもよいと感じる	よいと感じる	あまりよくない	よくないと感じる

・「異年齢保育形態である」ことは、特別な配慮を要する子どもにとって…

とてもよいと感じる	よいと感じる	あまりよくない	よくないと感じる

・「異年齢保育形態である」ことは、その他、一般の配慮を要する子どもにとって…

とてもよいと感じる	よいと感じる	あまりよくない	よくないと感じる

（質問４：自由記述）

「異年齢保育形態であること」に関して、先生方が感じられていること（子ども・保育者にとって／よいと感じる点・難しい点／など）について自由にご記入ください。

（子どもにとって）
（保育者にとって）

＜異年齢保育を進めるにあたっての工夫や配慮＞＊書ききれない場合は、裏面をご利用ください

（質問５：保育計画立案に際しての配慮事項）

月案を立てる際、どのような点を意識して作成していますか。また、特別な配慮を要する子どもたちに関しては、どのような形で計画上記されていますか。

（質問６：保育展開に際しての配慮事項）

実際に異年齢保育の形態で保育展開をするにあたっては、全体としてどのような点に配慮されて進めていますか。また、特別な配慮を要する子どもたちに関しては、どのような点に配慮（全体の中での配慮、個別的な配慮等）されて進めていますか。

ご協力、ありがとうございました。